

特別養護老人ホーム入所を辞退することに関する一考察**－2 つの特別養護老人ホームの 2 年間の動向からの検証－**

東北福祉大学大学院博士課程 岩澤 竜司 (8330)

[キーワード] 特別養護老人ホーム, 入所待機者, 入所辞退

1. 研究目的

特別養護老人ホーム（以下、特養）は常時介護を要する人のうち在宅において介護が困難な人を対象としている。国は介護の必要の程度及び家族の状況等を挙げ、必要性が高いと認められる人を優先的に入所させるよう努めなければならないことを理由に、平成 14 年 8 月介護保険法の「指定介護老人福祉施設の人員・整備及び運営に関する基準」の一部を改正した。

全国における特養に入所申込をして入所を待っている（以下、入所待機者）は、平成 25 年 10 月時点で約 52.4 万人となり、平成 21 年 12 月に集計した調査の 42.1 万人より、約 4 年間で 10.3 万人増加している。特養に入所申請してもなかなか入れない状況となっている。

ところが、このように多くの入所待機者がいる中、やっと特養の入所の順番がきたにもかかわらず入所を辞退するケースがある、という施設関係者からの話しを聞く。

本研究では、在宅において介護が困難な人の中から、より優先度の高いと判断された入所待機者がなぜ入所を辞退するのかを問うことを目的にする。

2. 研究の視点および方法

まず、前回の研究¹⁾で、入所待機者に関する先行調査研究を整理した結果、明らかになったことは以下の 3 点である。

1. 多くの入所待機者は特養に入りたくはないが、家族には迷惑をかけたくないために仕方なく入所しようとする傾向がある。
2. 特養入所申請は本人には知らせずに家族が行うことが多い。
3. 特養から「入所できるという連絡が来たらどうするか」を、入所申請をして、在宅生活をしている本人・家族に聞いたところ、本人・家族とも「すぐに入る」が最も多かった（本人 44.5%、家族 58.6%）。一方、申込者家族が「今回は断る」「すぐには決められない」のいずれかを選択した割合は 31.3%であった。家族が「すぐには決められない」理由は、「本人の意思が固まっていないから」が多い。

しかし、特養入所を辞退することに注目した調査研究はわずかしか見当たらなかった。そこで本研究では、協力が可能であった 2 つの特養について、入所申請から入所までの、あるいは入所順番がきたのに入所を辞退するまでのデータを整理して考察するものである。一先ず調査対象期間は平成 24 年 4 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日までの 2 年間とした。

3. 倫理的配慮

本研究では日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守し、対象となる施設を匿名化して使用するデータから入所者等が特定されないよう十分な配慮を図るものである。

4. 研究結果

本研究では岩手県内のそれぞれが別々の市町村にある特養 A と特養 B を対象に調査を行った。その結果、2年間で、特養 A は 126 人が新規入所し、9 人は入所順番がきたにもかかわらず入所を辞退している。一方特養 B は 48 人が新規入所し、50 人は入所順番がきたにもかかわらず入所を辞退している。

このように特養 A と特養 B、双方に入所を辞退した人が存在した。特に特養 B は入所した人の数と入所を辞退した人の数がほぼ同数であった。

ここで一言、特養 A と特養 B はそれぞれの市町村で最も長い歴史をもつ、地域の高齢者福祉の一翼を担ってきた施設であることから、入所を辞退するということが、これら 2 つの特養に何らかの問題があるのではないか、という疑念を持つには至らない。

特養 B の入所までの流れであるが、入所申請をすると、「要介護度」「家族の状況」「居宅サービスの利用状況」等からなる特養 B 入所判定基準により、本人が優先して入所する必要があるかどうか点数化される。この点数の上位約 30 人に対して、3ヶ月に1度開催の入所判定会議前に入所の意向確認がなされる。この時点で 30 人中、約半数の人が、入所の意向が無いことを表明するとのことである。残る 15 人程度が入所判定会議の審査対象となり、この 15 人の入所優先順位 1 番目から 15 番目が決定されるのである。特養 B に空きが出た場合、1 番目の人から順番に入所できる旨の連絡がなされるのである。しかし、この 15 人の約半数が入所を辞退するとのことである。

5. 考察

特養への入所を希望していた家族が、いざ入所が決まる段階になり、心中では自宅で生活したいと想っている本人の気持ちと介護負担の重さに心は揺れるのではないだろうか。本人の気持ちの側に傾き入所を辞退することもある。つまり、特養生活相談員や介護支援専門員等の援助者が、客観的にみて、特養に入所したほうがよいと思われる入所待機者が、入所順番がきたにもかかわらず入所を辞退するということもあり得るのではなからうか。これは、援助者が安易に入り込めない本人と家族の奥深い領域であるのかもしれない。

特養はそれぞれの入所判定基準に従って優先して入所する人を決定している。しかし、入所判定基準が不完全であるために、今もなお、誰を優先して入所させればいいのか、という議論は尽きないのである。ただ、いくら誰を優先して入所させればよいかを精査し尽くしたところで、入所を辞退する人は出続けるのだろう。誰を優先して入所させればよいかを考えることはもちろん大切であるが、入所を辞退する入所待機者がいるという事実からは、むしろ、入所を辞退した本人、家族の心中を察する努力をし、その後の支援をどうすればよいかを真剣に考えることの必要性こそが問われていると感じるのである。

注 1) 岩澤竜司 (2014) 「特別養護老人ホームの入所順番がきたにもかかわらず入所を辞退するということが意味することー先行調査研究を整理してー」『日本社会福祉学会東北部会第 14 回研究大会 (岩手大会)』(岩手県立大学) 32-33. より